

神戸の観光振興に向けた提言

平成28年6月

神戸市会 経済港湾委員会

目 次

	頁
■ はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
■ 委員会の活動状況・・・・・・・・・・・・・・・・	2
■ 提言の内容・・・・・・・・・・・・・・・・	3
■ 協議の過程で一致しなかった内容・・・・・・・・	11

■ はじめに

本委員会は、この一年を通じて神戸経済の活性化による雇用機会の拡大や国際、観光都市の魅力創造による集客力の向上等を目指し取り組んできました。

その中で、他都市への行政調査を行うことにより、激化する都市間競争において、いかに神戸市が発展していけるのかを論じることとなり、特に、MICE誘致、クルーズ客船誘致、滞在型観光について三つのテーマに絞り、協議を進めることとなりました。

その間、テーマごとに参考人を招致し、意見交換等を行うとともに関連施設への視察も実施し、そこで論じられた意見を集約し、取りまとめられたものが本政策提言であります。

平成29年1月1日の神戸開港150年を迎えるに当たり、広く世界に神戸の魅力を発信する絶好のチャンスと捉え、神戸特有の魅力でより多くの観光客を誘致し、最高のおもてなしで歓迎し、もう一度行きたくなるまち神戸の創出を希求いたします。

そこで、本政策提言が、神戸開港150年を迎えるこの機に、港を中心とした神戸観光の振興・国際観光の更なる拡大を目指し、新たなる未来都市こうべ創出の一助になればと期待するところであります。

■ 委員会の活動状況

• 委員会の活動状況

- 第1回：平成27年7月15日（水）
神戸ポートターミナルを实地視察
- 第2回：平成27年8月31日（月）～平成27年9月2日（水）
長崎市, 福岡市等を行政調査(クルーズ客船誘致, MICE誘致等)
- 第3回：平成27年11月24日（火）
神戸国際会議場・神戸国際展示場を实地視察
- 第4回：平成27年12月18日（金）
MICE誘致の取組について意見聴取（参考人：地方独立行政法人神戸市民病院機構 神戸市立医療センター中央市民病院 坂井信幸氏）
- 第5回：平成28年2月23日（火）
クルーズ客船誘致について意見聴取（参考人：株式会社 クルーズ・バケーション 代表取締役社長 木島榮子氏）
- 第6回：平成28年4月18日（月）
都市の観光振興について意見聴取（参考人：北海道大学大学院 客員教授 小林英俊氏）
- 第7回：平成28年5月24日（火）
提言書案について委員間討議（協議会）
- 第8回：平成28年5月30日（月）
提言書案について委員会決定

• 経済港湾委員会委員

- 委員長：菅野吉記（公明党：兵庫区）
- 副委員長：五島大亮（自由民主党：北区）
- 委員：安井俊彦（自由民主党：東灘区）
平野昌司（自由民主党：兵庫区）
徳山敏子（公明党：北区）
松本のり子（日本共産党：東灘区）
林まさひと（日本共産党：西区）
大井としひろ（民進こうべ：須磨区）
外海開三（神戸維新の会：東灘区）
新原秀人（民進党：兵庫区）
あわはら富夫（新社会党：中央区）
岡島亮介（無所属：西区）

■提言の内容

1. MICE誘致についての提言

【提言①】

老朽化した神戸国際会議場・神戸国際展示場等のコンベンション施設の整備・改修を積極的に推進すること。

【説明①】

会議設備の充実を図るため、音響・映像機器及び無線LAN環境の整備も喫緊の課題ではあるが、今後、大規模な国際会議の誘致を推進する上で、5,000人規模の会議場のニーズが高まる場所であり、また、大会議場だけではなく、フレキシブルに部屋のレイアウトが変えられる会議室機能も必要であることから、整備・改修も視野に入れた検討を進めること。ただし、交通アクセスにも恵まれ、ラグジュアリーなホテルが隣接する中で、コンベンション施設が整っており、そこでのすべての会議場は雨にぬれることなく行ける最高の立地条件であることから、近隣現有施設も利用し、他都市にない神戸の強みとして現状の場所で整備を進めることが望ましい。

【提言②】

MICE誘致のための長期的視野での人材育成を可能とするため、神戸国際観光コンベンション協会等が神戸国際会議場・神戸国際展示場を長期に安定して運営できるような仕組みを構築すること。

【説明②】

MICE誘致を成功させるために最も重要な要素は、人材である。誘致における営業活動に対する人脈や、施設におけるMICE開催者に対するサポートのノウハウは、すべて雇用されている人材に蓄積されていくものである。

これまでの指定管理者制度における運営においては、指定管理者として選定されることを目的とした納付金競争が常態化していたこともあり、選定事業者の旨みがなくなっていた。人件費を削減することにより、この競争に勝ち残ってきたため、人材育成が不十分な状況が続いており、ノウハウを持った職員の後継者育成もできていない。

適切な利益確保による人材育成充実のため、神戸国際観光コンベンション協会等が長期的に運営できるような仕組みを構築するべきである。

【提言③】

コンベンション誘致のため、コンベンション施設の紹介及び神戸の魅力をアピールする斬新的なプレゼンテーション用の動画を制作し、発信していくこと。

【説明③】

コンベンションを誘致するためには、神戸そのものをもっともっと知ってもらわなければならない。神戸の魅力を発信するため、交通アクセスの利便性の良さや神戸ビーフだけではなく、神戸スイーツなど美味しいものも紹介するなど、神戸の魅力、神戸の良さをもっと発信し、もっとアピールしなければならない。そのためには仕掛けづくりが必要であることから、コンベンション施設の紹介だけではなく、神戸の魅力を紹介するITを駆使した斬新的なプレゼン用の動画を発信すること。

【提言④】

国際学術会議の誘致を促進するため、大学との連携強化を図ること。

【説明④】

国際学術会議の誘致をセールスする相手は、神戸大学を含む神戸市内の大学に限らず兵庫県内の大学にも、また、県外にも広げれば、例えば、大阪大学や京都大学などアプローチする候補は多くある。神戸のコンベンション施設の利便性の良さは十分誘致するに値することから、積極的にアプローチすること。会議を誘致する上で、会議を準備・運営する先生方をサポートする体制づくりや公的な補助金制度の充実に加えて、会議を開催できる先生方への徹底したアプローチが必要である。また、会議を誘致するということを各大学の方針の一つに加えていただくよう、大学へ働きかけること。

【提言⑤】

インセンティブツアー、スポーツ・文化イベント等、分野を広げ、かつ多局横断的な誘致をすること。

【説明⑤】

現状において、医療産業都市を背景とした学会関連の国際会議においては他都市をリードしているが、その他の分野においては伸びしろが存在する。

経済効果を考えた場合、企業の研修旅行や、スポーツ・文化の各種団体の全国大会などが神戸で開催されることが望まれる。

例えば、スポーツ大会などは教育委員会などが関与し、市民に対する教育という側面から、神戸市域内の参加者に限定されたイベントとなる傾向があるところだが、全国大会の開催などを神戸に誘致し、市域外からの参加者を神戸に招き入れることが必要である。

このような取組のため、開催可能性があるイベントの掘り起こしから誘致まで、関連局が連携した横断的な誘致活動が行われるべきである。

2. クルーズ客船誘致についての提言

【提言⑥】

神戸港を発着港とする外国客船クルーズの誘致における取組を強化すること。

【説明⑥】

中国・台湾発着のクルーズは、トレンドが3泊～4泊となっているために、博多港や長崎港などの、中国・台湾と距離が近い港との勝負は物理的に劣後してしまう。それ以外の外国客船クルーズについても、寄港地として選定された場合に、乗船客が神戸市内を周遊するよりも、京都などにオプショナルツアーで大挙するケースが多く、経済効果の観点から、誘致のメリットが低いことが挙げられている。

神戸港発着クルーズの場合、乗船前に必ず神戸市内を通るため、経済効果の観点から、誘致のメリットが比較的高いと考えられ、寄港クルーズの誘致についても、ある程度の経営資源は割きつつ、神戸港発着クルーズの誘致に力を入れるべきである。

【提言⑦】

瀬戸内海クルーズの発着港を目指し、ツアーの誘致促進に努めること。

【説明⑦】

瀬戸内海は、3つの大きな橋をくぐるスリリングさもあり、欧米の方からは日本のエーゲ海と言われるように世界に誇る多島海の美しい景観を持つ非常に魅力あふれるクルーズ観光地であるが、現状は、漁業の時期、航行できる日時や時間に多くの制限がある上に、航行料が高いことなどから、貴重な観光資源が利用しきれていない。

更なるクルーズ客船の誘致を推進するため、本市が瀬戸内海の各都市と連携を図り、関係諸団体との調整を進め、瀬戸内海をクルーズできる環境整備に努めることが急務である。

【提言⑧】

寄港地としての神戸の新たな魅力を発信するため、港湾周辺の整備に努めるとともに、より効果的な既存観光資源の活用に努めること。

【説明⑧】

神戸港は、背景に山があり、目の前に海が広がる大変景観が優れた港であり、六甲山系から見下ろす夜景などは特筆するものといえる。

その一方、港から街、同じく街から港が見えにくく、港の周辺に憩う場所が少ないこともあり、港町としての風情に欠けている点もある。

今後、港湾周辺の整備を進めるに当たっては、既存の歴史ある観光資源の利活用に一層取り組むとともに、港町としての景観、乗船客がまた訪れたいと思わせる旅情あふれる港町神戸のコンセプトを重要視して行うことで、クルーズ船等による旅行者が近隣を周遊できる環境を整えるべきである。

また、ハーバーランドからポートターミナルにかけての港の一体感がなく、それぞれのアクセスも分断されていることから、遊歩道でつないだり、シティー・ループバスの路線を拡充するなど、港の交通アクセスの整備も早急に行うべきである。

【提言⑨】

乗船客による経済効果を神戸市に導くために、寄港時の歓迎イベントの企画や神戸の特産物の販売に努めること。

【説明⑨】

現在、クルーズ船が神戸に入港しても、バスに乗りし京都・大阪などの観光地に直接向かっていく乗船客が多く、クルーズ船乗船客の経済効果を効率的に取り込めていない。

乗船客には観光の一環となり、市民のみならず市外からも参加者が集うような国際交流のイベントを企画し、短時間での「日本体験」「神戸体験」ができるようにするべきである。

また、乗船客が特に神戸や兵庫の特産品の買い物ができるようなブース設置を行うことで、豊かな農水産物やスイーツなどが存在する街であることのPRにもつなげるよう取り組むべきである。

【提言⑩】

乗船客のニーズや動線を踏まえ、更なるソフト面の充実や、分かりやすいデザインに統一した多言語公共サインの整備をすること。

【説明⑩】

観光立国実現に向けたアクション・プログラムによると、クルーズ客船で入港する外国人旅行者数を平成 32 年に 100 万人を目標とする「クルーズ 100 万人時代」を目指していたが、目標を大幅に前倒して達成し、平成 27 年にクルーズ船により入国した外国人旅客数は約 111.6 万人と順調に推移していることから、今後ますます乗船客の増加が見込まれる。

平成 29 年 1 月 1 日に開港 150 年を迎える神戸市にあっては、不特定多数の方が利用する公共性の高い標識・地図・案内誘導板等の統一された多言語公共サインを早急に設置し、海外からの観光客が快適に滞在できるように取り組むこと。

3. 滞在型観光についての提言

【提言⑪】

効果的・効率的な観光施策の展開のため、官民一体での取組を強化すること。

【説明⑪】

プロモーションを例にすると、神戸市では神戸国際観光コンベンション協会が中心となって実施しているが、現状では、提供される情報は行政関係のイベントが中心となっているなど、民間との連携が不十分である。

他都市においては、旅行事業者や観光施設、NPO、地元と組んだ事業展開がなされている。

神戸においても、行政が関係する観光資源や大規模なイベントのみならず、地元で眠っている観光資源やイベントなどをプロモーションしていくなど、官民一体での取組ができるよう、例えば、神戸版DMO※など、早急な仕組みづくりが求められる。

※Destination Marketing/Management Organization

【提言⑫】

市内観光の周遊性を高めること。

【説明⑫】

他都市においては、100円バスや観光施設の割引も含めた市内周遊券などが整備されている。神戸市では、南北の坂道を克服する必要もあり、安価で使いやすい交通手段の確保に努めるべきである。

【提言⑬】

六甲山・摩耶山など夜景観光へのアクセスを向上させること。

【説明⑬】

大都市の市街地と国立公園が近接している恵まれた環境はまれである。また、摩耶山の掬星台からの夜景は、日本新三大夜景に選定されるなど、六甲山・摩耶山は優れた観光資源である。ところが、これら山上へのアクセスの利便性は低く、山上の各施設の経営状況もそれほど良くはない状況である。

特に掬星台では、ケーブル下に駐車場がなく、また夏のシーズンを除いてケーブルが夕方までに営業を終了するなど、アクセスが非常に悪い。

中心市街地である三宮からのアクセスを高め、より有効な観光資源活用につなげるべきである。

【提言⑭】

関西全体を面で捉えたプロモーションを行い、旅行客の入口・出口を神戸にするようなプロモーションに取り組むこと。

【説明⑭】

神戸市には、夜景や異国情緒あふれる街並み、美しいウォーターフロントなどが存在するが、訪日外国人に対して各観光地へのアクセスの良さも、プロモーションしていくべきである。

大阪国際空港から約1時間であること、便数は少ないものの地方空港としての神戸空港も持つこと、また、目的地としての京都・奈良・大阪・姫路・淡路などとの移動の利便性を持つこと、そして、瀬戸内クルーズなどのクルーズの起点となる神戸港を持っていることなどが挙げられる。

このように、神戸へ誘客するために神戸を目的地としてプロモーションを行うことに合わせ、関西へのゲートが神戸であるような視野の広い事業展開を行うべきである。

関西の入口である神戸に宿泊の後、京都や奈良への日程を組んでもらうような、また、各観光地を巡った最後に、関西の出口である神戸に宿泊してもらうようなプロモーションを行うべきである。

協議の過程で一致しなかった内容

② 提言案		③ ②に対する意見
<p>① 大項目</p>	<p>【提言】 フライ&クルーズの推進強化に努めること。</p> <p>【説明】 本市は、客船ターミナルと空港間、市街地並びに近隣の観光圏へのアクセスの利便性が高いことから、現在、神戸港とアクセスの良好な関係を利用したフライ&クルーズの推進を図っているが、将来的に期待される神戸空港における発着枠の拡大に伴うLCCの参入を進めていくことで、より安価な旅行商品開発が可能となることから、日本各地からフライ&クルーズを利用したツアー客が神戸に集まる仕組みづくりを構築すること。</p>	<p>・神戸空港の発着枠拡大は期待できず、LCCなどの安価ツアーなど、規制緩和よりも安全・安心な観光行政を推進すべきである。</p>
<p>クルーズ客船誘致</p>	<p>【提言】 神戸の特性をいかした医療産業と連携したオプショナルツアーを推進し、クルーズ客船の誘致拡大につなげる。</p> <p>【説明】 神戸港に停泊する間に、観光やショッピングはもとより、神戸の先進的な医療産業をもつて、例えば、目の検査、目の治療、短時間でもできる手術や治療など、また、より正確な健康診断を受けられることも可能ではないかと考えられる。船会社に医療産業を更迭PRし、神戸に行けば、より健康になって帰ってこられるといったアピールを船会社に積極的に行うこと。</p>	<p>・神戸の特性をいかした客船誘致は必要だが、指向されている医療ツーリズムについては、日本の通常医療を海外の富裕層が買い、日本の患者さんの保険適用での治療よりも、多額の報酬を払う海外の患者が優先される懸念があるなど反対の声があり、医療の営利・観光化を推進すべきではない。</p>

① 大項目	② 提言案	③ ②に対する意見
<p>滞在型観光</p>	<p>【提言】 神戸空港は国際線発着可能な国際空港とすること。</p> <p>【説明】 政府が成長戦略の大きな柱として観光を掲げ、平成32年には訪日外国人観光客4,000万人、平成42年には6,000万人を目指すとしている。</p> <p>日本観光のゴールデンルートは、関西空港～京都～富士山～東京～東京圏空港というコースとなっているが、関西におけるゲートとしての空港のニーズは今後もより高まることが考えられる。ただし、現状の国際空港のキャパシティではこの人数目標をこなすことは困難である。</p> <p>また、訪日外国人観光客の視点から見た場合、京都・奈良・その他の西日本の観光地にも近接する神戸空港の利便性は高く、海上空港であり、24時間化が可能であることなどから、ゲートインとして神戸空港を利用するメリットは高い。</p> <p>そして、神戸市としても観光産業のみならず、企業活動のためにも空港の国際化のニーズは高いことなどから、神戸空港は早期に国際化するよう、更に取組を強化すべきである。</p>	<p>・神戸空港は当初の計画は破綻しており、神戸市が市民に約束した独立採算や他の会計に負担をかけないなどは裏切られた。さらに、国内線30便枠で行うとしながら規制緩和と国際便を求めると、市民に対する二重の裏切りであり、反対である。現状を市民に知らせ、空港の在り方を市民に問うべきである。</p>
	<p>【提言】 医療観光施策を進めること。</p> <p>【説明】 震災復興事業としてポータルアライランドで開始された神戸医療産業都市構想は、医療産業関連企業の集積が進み、平成27年度において300社の企業集積、7,000名の雇用を実現しているところであるが、最終的な目的である国際医療貢献においては、いまだに実績に乏しいところである。</p> <p>医療産業関連企業の集積は一定の成果を上げてきているところであるが、研究施設などの一般的な顧客が立ち寄らない施設が多くなっており、現状の医療産業都市は経済効果の裾野が狭い。</p> <p>外国人に医療を提供することで、医療を受ける顧客やその家族などが神戸を訪れ、交通・外食・宿泊など幅の広い業種に経済効果が広がり、神戸市の基幹事業としての恩恵が行き渡ることとなる。</p>	<p>・医療産業都市が「実績に乏しく」「効果の裾野が狭い」というのは全く同感である。医療産業都市構想そのものを中断し、再検討すべきである。また、医療ツーリズムについては、日本の通常医療を海外の富裕層が買いたい、日本の患者さんの保険適用での治療よりも、多額の報酬を払う海外の患者が優先される懸念がある。医療の営利・観光化を推進すべきではない。</p>